

二次元ぷち文庫

表紙イラスト：てんまぞ

山本沙姫

after school tactics
放学后
たくていくす
番外編
秘密の誘惑アトリエ



試し読み版

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『放課後たくていくす番外編 秘密の誘惑アトリエ』
に基づいて作成しております。

※本作は二次元ドリーム文庫『放課後たくていくす 誘惑の部活タイム』（キルタイムコミュニケーション刊）とともにお読みいただけますと、よりお楽しみいただけます。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



after school
tactics

放課後
たくていくす

秘密の誘惑アトリエ 番外編

山本沙姫
表紙 / てんまそ

登場人物紹介

Characters

さかた ぎんの すけ

坂田銀之助

王将学園の生徒で、金枝の兄。先輩・後輩ともに好意を寄せられる人のいい少年。

さかた かなえ

坂田金枝

銀之助の双子の妹。兄に対し一人の男として好意と愛情を寄せている。

ひょうどう あゆみ

兵頭 歩

坂田兄妹のクラスメイト。金枝とは親友で同じバレー部員。

かつら ぎけい こ

桂木桂子

化学部の気弱な少女。常に白衣を身にまとい、その巨乳を隠している。

—— 第一戦 賑やかな壮行会 ——

一つの町ほどの広大な敷地に、将棋の駒を模した建物が並ぶ、一風変わったマンモス校、私立王将学園。六十年前、将棋好きで知られた大富豪によって、世界の王将たる人物を育成する事を目的に建てられた教育施設だ。

その将棋盤を髣髴とさせる9×9枠に区分けされた校庭の真ん中で、全生徒を挙げての一大イベントが開催されていた。全国大会出場を明日に控えた各種運動部の壮行会である。出陣を前に、学友に囲まれて励ましの言葉を受ける選手たち。その中に、ひととき目立つ賑やかな一団があつた。

「七華^{ななか}ねえ、明々後日の決勝、必ず応援にいくから絶対に勝ち残つてよ」

「授業がなければ予選から行けるのになー。とにかくがんばつてね、七華ちゃん」

長い黒髪をポニーテールに束ねた、Dカップはあろう巨乳の新体操選手の手をしつかりと握り、興奮気味に励ます双子の兄妹。

黄金色に近い、サラサラの茶髪をスッキリと切り揃えた華奢^{きゃしゃ}な体つき^{たいけい}の童顔少年と、瓜二つの幼顔で、少し癖のある髪を持つ、発育途上な体躯^{たいこ}の少女。坂田銀之助^{さかたぎんのすけ}と金枝^{かねえ}である。妹思いの心優しい兄と、彼を一人の異性として愛してしまい、一度は一線を越えてしま

った妹。しかし今では普通に仲のよい兄妹に戻り、身を引いた金枝は、兄を愛する仲間たちを応援しつつ、誰か一人に独占されたくないよう立ち振る舞っている。

「ありがとう銀之助。金枝。あたし、絶対決勝まで残って、そして優勝するわ」

二人に励まされているのは、新体操部キャプテン、角脇七華^{かどわき}。坂田兄妹とは幼馴染で、二人にとっては姉のような存在だ。いや、銀之助にはそれ以上と言っても過言ではない。

「お待ちなさい、銀之助さん。土曜日はテニスの決勝もあるんですわよ。ま、さ、か、応援に来ないなんて事は、ありませんわよね」

手を取りあう三人をバラバラにするように、七華に引けを取らない巨乳のテニスルック娘が割って入る。気の強そうな吊り上った目尻と、広い富士額^{ふじかみ}が特徴の彼女は、現理事長の孫娘、テニス部キャプテンにして学園を牛耳る女王様、飛高麗香^{ひたかほ}だ。

「えっ、ええつと……」

突然の乱入者に睨まれて、思わずたじろぐ気弱な美少年。かつて目の前のお嬢様は多くの美少年をペットにしている、そのコレクションに銀之助も加えようと企んでいたのだ。しかし今では悔い改め、純粹に彼を愛し、そして愛されたいと願うようになっていた。

「まあまあ、麗香お嬢様。そんなに睨んでは銀之助さんがかわいそうですよ」

怒るわがまま令嬢をなだめるように、黒縁眼鏡をかけた三つ編み少女が話しかけてきた。九十センチ近くある瑞々しいスイカのような爆乳と、きれいな洋梨型に大きく張り出し

たお尻が目を引く、ぼっちゃり型でおとなしそうな面持ちの色白少女、かつらぎけいこ桂木桂子である。学園と取引のある会社の社長の娘という立場から麗香には逆らえず、腰巾着と揶揄されるような従属関係にあった。しかし、今でも学内でお嬢様の身の回りの世話をしているものの、今の二人は単なる主人と従者ではない。一人の少年をめぐる恋のライバル同士であり、友人でもあるのだ。

気丈なお嬢様にきつく睨みつけられて、動揺していた気弱少年は、お下げの先輩に救いの手を差し伸べられてホッと胸をなでおろす。だが、彼にさらなる脅威が襲いかかる。

「たありやあああああああーっ!!!」

ヒュンツッ！ ドカーン！

背後で叫び声が響いたかと思つた瞬間、華奢な身体が宙に舞い、背中から地面に落ちた。「痛ててっ……ま、またですか、やぶるま矢車先輩……あつ！」

自分を投げ飛ばした小柄な少女を見上げて抗議するものの、とっさ咄嗟に彼女から目を逸らす横たわりし軟弱少年。下からだど両手を腰に当てて、足を開いた威張りポーズを取る犯人のスカートの中が見えてしまつてゐるのだ。

「銀之助くんっ！ 自分の事を忘れちゃあ困るッス。その日は、柔道の決勝戦もあるんだからねっ！」

縞々パンツ丸見えなのを気にもせず、嬉々として語りかけるのは、麗香の従妹にして女

子柔道部主将の矢車香かわりである。銀之助にとつては初めての女性であり、以来、何かにつけて投げ技を仕掛けてくる困り者だが、これが彼女の愛情表現なのだ。

「もうっ、また無茶な事して、ダメですよ香先輩」

愛しい男の子を投げ飛ばしてご満悦の柔道娘に、ふつくらとした頬に、大きくクリクリとした瞳の子供っぽい印象の娘が、見た目に似合わぬ落ち着いた大人びた口調で話しかけてきた。

背中まで届く長い亜麻色の髪に、紋白蝶を思わせる可愛らしいリボンを付けた、身長百四十センチほどの小柄で華奢な少女。僅わずかに膨らんだ胸と、ミニスカートから伸びた細く短い足と、小学生と見紛うような体軀からは、とても坂田兄妹の同級生には思えない。金枝の親友で、クラス委員長の兵頭歩ひょうどうあゆみである。かつて、銀之助の筆下ろしをしようとしたところを香に邪魔されたという事があったものの、今では二人は大の仲良しなのだ。

「大丈夫？ お兄ちゃん」

「あっ、ああ……平気平気」

妹の助けを借りて、ヨロヨロと立ち上がる投げ飛ばされし軟弱少年。彼を気遣い、二人の巨乳娘が背中に付いた砂を。パタパタと叩き落とす。

その傍らで、騒ぎを起こした張本人はリボン少女と爆乳眼鏡娘を呼び寄せて、何やら怪しげなヒソヒソ話をしていた。

「自分たちがいない間、頑張つて銀之助くんをモノにするツスよ」

「もちろん、すでに準備は整えてありますよ。ねっ、桂子先輩」

「ええ」

選手の壮行会なのに、いつの間にかやらしい男の子を中心に盛り上がる六人の娘たち。

この時、離れた場所から彼女らを羨ましそうに見つめる者がいた事に、気付く者はいなかった。

——第二戦 坂道を行く少女——

王将学園がそびえる小高い丘へと続く、長くなだらかな坂道。ここを大勢の学生たちが上って行き、巨大な将棋の駒を模した校舎に吸い込まれていく様は、毎朝おなじみの光景だ。賑やかな朝の通学路でも、銀之助と彼を取り巻く女の子たちは目立つ存在である。

「お兄ちゃん、土曜日の決勝、一緒に七華ちゃんの応援に行こうね」

大好きな兄の細い左腕にしがみつき、ピョンピョンと飛び跳ねながら小さな乳房を押しつけて甘えてくる、朝から喧しい金枝。

「いいえ、銀之助君はわたしと一緒に香先輩の応援に行くのよ、ねっ」

右手にしがみついて、やはり胸を押しつけながらしつとりと落ち着いた口調で誘いをかける歩。

「違いますよお、わたしと麗香お嬢様を応援しに行くんですよね、銀之助さん」

二人の小娘に対抗するかのようには、桂子も背後から腰に手を回し、ギョツと抱きしめてきた。女の子たちに揉みくちやにされて、困惑気味の純情少年。大きさも柔らかさも違う六つの乳房が、三方向から同時に銀之助の華奢な身体を弄ぶ。小振りながらもスポンジのように柔らかな貧乳、微乳にサンドイッチにされ、後ろからは巨大なプリンの如き爆乳が、背筋を擦るように下から上へと擦りつけられていく。

「み、みんな……ちよつと、離してよお……」

おぼつかない足取りで、右に左にふらつきながら坂道を行く華奢な少年の遙か後から、猛スピードで迫る者がいた。

シューッ、キイツツッ！

軽快な風切り音を立てながら走ってきたスポーツ自転車が、彼のすぐ脇でいきなり止まる。

「おはようございます、坂田先輩」

自転車を下りて話しかけてきたのは、背中まで届く長い黒髪をツインテールに束ねた、色白で細身の少女だ。決して大きいとはいえないが、女性である事を誇らしげに主張する、アンダー八十センチの美しく整ったバスト。短いチェックのスカートから伸びた細い華奢な足に、白いニーソックスでキュッと引き締められた脹ら脛には、長い坂道を猛スピードで駆け上がるほどの脚力があるとは微塵みじんも感じられない。

ハンドルを握る指は、白魚のように細くしなやかで、華奢な腕にも、扱いの難しいドロップハンドルを難なく取り回せるほどの力があるようには見えない。

短く切り揃えた前髪の下から覗く広い額と、睫毛まつげが長く、キツまと目尻たまがわの吊り上った茶色の瞳に、薄紅色の唇が目を引き、気の強そうな美少女。彼女の名は玉川翔子たまがわしょうこ。銀之助が所属する美術部の後輩である。

「や、やあ……おはよう、玉川さん……」

額に汗を滲ませ、少し引き攣った笑顔で答える気弱な先輩。生真面目で、だらしのない人が大嫌いな彼女は、たとえ相手が上級生であつても怠惰な素振りを見せる者には食つて掛かるほどの癩癩持ちである。故に、今の状況を見られるのは好ましくない。

「まったく、朝っぱらから女の子に囲まれてデレデレして、作品が上がった人は気楽でいいですね」

周りに張りつく先輩女子たちを見回しながら、腰に手を当てた威圧的なポーズで、皮肉っぽい口調で銀之助に言い放つ気丈なツインテール娘。案の定、今の彼女には自分が女の子にチャホヤされて喜ぶ、だらしない男に見えているのがわかった。

「い、いや、別にそういうわけじゃ……」

恐る恐る弁明しようとする軟弱少年。だが、彼を助けようとする者があらわれる。

「ち、ちよつとあなた！ 先輩に対してそんな言い方……」

最年長の三つ編み娘が、生意気な下級生を窘めようと声を張り上げるが、朝の空気に溶け込むように、尻すぼみに消えていく。お仕えするお嬢様に勝るとも劣らぬ鋭い視線を飛ばされ、身がすくんでしまったのだ。

「では、失礼します。先輩」

刺々しい口調で言い放つと、彼女はサツとお辞儀してから再び自転車に跨がり、坂道を

駆け上がっていった。サドルに腰掛けない立ち漕ぎで、小ぶりなヒップを左右にフルフルと揺り動かしながら走り去っていく自転車娘。ペダルを一踏みする毎に、ヒラヒラと捲れるスカートの中から、薄いブルーの下着に覆われた可愛らしいお尻が顔を覗かせた。

「あっ……」

双曲の谷間に、ずり上がった薄布が食い込んでいく淫靡いんぴな姿に、見送る先輩の目が惹きつけられてしまう。

「何見てるのよ、お兄ちゃんのエッチ！」

口を尖らせて怒る妹が、兄の柔らかな頬をキュッと摘んで引っ張った。

「いつ、痛いよ金枝……やめてっば……」

突然の攻撃に口を歪ませ、目を潤ませながら抗議する銀之助。

「何よあの子、感じ悪いわねえ」

普段は温厚で、大人びた物言いをする歩が、珍しく頬をプーツと河豚のように膨らませて不満を漏らす。

「美術部の後輩、玉川翔子さん。悪い子じゃないんだけど、少し気難しくて、それに今、コンテストに出す作品の事で悩んでるみたいなんだ」

走り去る後輩を庇い、級友をなだめるお人よし少年に、背後に張りつく巨乳の先輩が、意味ありげなはずらっばい口調で話しかけてきた。

憂いを秘めた輝きを放つ、茶色の瞳で横たわる愛しき先輩を見つめながら、搾り出すような細かい声で言い放つ翔子。いつもの気丈さが消えうせて、今にも崩れ落ちてしまいそうなぐらゐ織細なガラス細工の如き可憐な少女の姿が、そこにある。

「……玉川……さん……」

彼女の変貌^{へんぼう}ぶりに驚く彼をよそに、女神少女ははしたないぐらゐ足を蟹股に大きく開き、腰を下ろしていく。真つ赤に熟したイチゴのような亀頭が、女裂にあてがわれた。

「まつ、まつて！ それは……」

敏感な一物に触れる湿り気に、ハッと我に返り制止する銀之助。しかし、翔子は聞く耳を持たず、そのままさらに腰を下ろす。

ぐちゅっ！

粘液に覆われた肉同士が擦れあう、淫らな音が響くと共に、脈打つ巨大な肉棒の表面を、処女の証がツツーつと垂れ落ちていく。

「ぐっ、あうんっ……」

破瓜の瞬間、大きく背中を反らし、黒きツイントールをはね上げながら短く喘ぐ翔子。身を裂かれそうな激痛に耐えながら、愛する男性のモノをすべて受け入れようと、さらに膝を深く曲げて、己が膣内に巨根を迎え入れていく。

「いつ、いけない、そんな事しちゃ……」

咄嗟に彼女を払い除けようと伸ばした手がドレスの中に滑り込み、彼女の小ぶりなヒップを鷲掴みしてしまった。

「あんっ、そ、そこ……いいです、せんばあいつ……」

いきなり尻を揉まれるくすぐったさに、思わず艶っぽい悲鳴を上げてしまう後輩娘。そのおかげで緊張が解け、強張った股間から力が抜け、緩んだ産道の中を、大蛇のようなペニスが入り込め始める。

ズブツ、ジュブツ……。

初体験の少女には荷が重すぎる巨大な肉杭が、淫靡な音を立てつつ飲み込まれていく。

「うんっ、はっ、はあっ……こ、こんなに……」

もともと敏感な肉体の部位に、燃えるように熱い肉壁が粘液と共に絡みついてくる甘い刺激に、つい喘いでしまう横たわりし美少年。尻を掴んだ手も、柔らかいものを揉み抜く心地よさのせいで、吸いつくように離れられない。

「ひうっ、も、もつと、もつとおおお……」

自分の指では触れる事のできない、泉の奥底を高熱の肉棒でかき回される刺激と、暖かな手の平でヒップをこね回される刺激。前と後ろから同時にわき立つ、心地よさとくすぐったさが入り混じったような感覚が下半身一帯に広がっていく。

「うっ、ううーんっ……すぐく熱くて、まるで先輩の、絵への情熱……みたい……」

大好きな先輩と結ばれる喜びに、細い身を震わせながら喜び喘ぐと、ツインテールの娘はそのまま前へ倒れ込む。そして、腕立て伏せをするように、横たわる先輩の頭の脇に両手をついた。頬をほんのり赤く染めながら、潤んだ瞳でジッと見つめてくる。

「先輩……描かせて下さい。わたしの中に……」

蚊の鳴くような細かい声で囁くと、彼女はゆつくりと腰を動かしはじめた。巨大な男のモノを受け入れた痛みもあって、その動きはカタツムリの歩みの如くぎごちない。

プチュツ、チュクツチュクツツ……。

「くうっ、んっ、んっ、あうううっ……」

少しずつ、肉壺を内側から押し広げられる圧迫感に身体を慣らしていく、女神姿の健気な少女。固く瞳を閉じ、額に玉の汗を浮かべる姿が、どこことなく痛々しい。だが、そうまでして自分に尽くしてくれる彼女に、奉仕されし先輩は感動すら覚えつつあった。

「うぐうっ、あっ、そ、そこ……んあうんっ！」

無論、彼の心にわき立つのは感動ばかりではない。張りのある白い太股を露にし、胸元をはだけさせながら喘ぐ姿は何とも色っぽく、見上げる少年をときめかせる。湿った秘肉にこね回される一物から伝わる、ジワジワと痺れる感触も、彼を激しく興奮させた。

固いゴムのような男根が、少女の膣内でマッサージ機のように激しく、ブルブルと震える。「あはあっ、はっ、はっ、はあっ、いっ、いいひっ……わたしの中、ビクビク……ブルブ

ルしてゐるう……」

結ばれし先輩の喜びを体内で感じ取り、歡喜の叫びを上げる翔子。愛しき男性に尽くす事への満足感が身体の痛みを徐々に消し去り、初心うぶな女神の奉仕を大胆に変貌させていく。

「はあつ、あつ、ああつ、あんつ……」

白くなだらかな背中を、バタフライ泳法のように激しく波打たせ、全身を大きくスライドさせて肉の花弁で啜えた雄しべを撫で回す。身をずらすたびに、菊花をヒクヒクと痙攣させながら、小ぶりなヒップが上下にプリプリと揺れ動いた。

ジャポツ、ジュポツジュポツジュポツ。

時に大海の荒波を描くように激しく、時に小川のせせらぎを描くように繊細に筆を走らせる如く、緩急をつける腰の動き。秘裂の締めつけ。

「いいんつ、わ、わたしの……わたしのキャンバスに、いっぱい、いっぱい描いて……ふあうんつ……」

膺壁に亀頭の突端が触れるたびに、秘裂の奥底から皮膚の上を絵筆で擦られるようなピリピリした刺激が広がり、思わず喘ぐ翔子。

まるで、真つ白な心のキャンバスに、桃色の絵の具を塗りつけられていくかのような感覚に囚われていく。

ジユクツ！　グシユクツシユクツヂユプツツツ！！

互いの体液を混ぜ合わせながら、各々腰を揺り動かし続ける二人。腹上のツインテール娘が、ヒップを「の」の字を描くように捻りながら上下に伸び上げれば、釣られてマット上の茶髪少年も股間を上へと突き出す。

つながった秘所から染み出してくる快楽を、さらに高めるように。

「あつ、あはつ、はあつ、あんつ、いつ、いいんつ、せ、先輩の……オチン……チン……」
 興奮のあまり、端正な顔立ちには不似合いな卑猥な言葉を口走りながら、激しく悶える翔子。彼女の口から己が一物の名前が出るたびに興奮し、床から飛び上がりそうなほど腰を突き上げてしまう銀之助。

「すつ、ごいいんつ、も、もつと、もつと突いてへ……あつ、あぁーんつ」

あまりに激しい跳ね上がりのせいで、薄布のドレスが肩からスリりと滑り落ち、華奢な白い上半身が露になった。小振りながらも柔らかい乳房が、上向きにツンと尖った桃色の乳首が円を描くように、クルクルと大きく揺れ動く。

「あうつ、た、玉川さん……」

ぼやける視界に映る乳房の動きは、まるでつながった少年の身と心を天国へ誘う、天使の羽ばたきのようだ。その美しく、艶かしい姿に興奮し、一物にますます血液を溜め込んでいく。

肝心の絵を描く事も忘れ、激しく身を絡めあう二人。日が西の空に沈みかけた頃、女神

少年の肉体に、著しい変化が起きはじめる。

「んっ、んうんっつっ……あううっつっ！」

少女の膣内に打ち込んだ肉槍がブルブルと震え、己が限界を悟る銀之助。しかし、無意識のうちに少しでも長く彼女の秘所がもたらす快楽に浸ろうと、根元に力を込めてみずから射精を封じる。

だが、己が花弁をビリビリと振動させる肉棒の疼きに、射精の時が近いのを感じ取った翔子は、一刻も早く愛しき人の子種を受けたいがために、ラストスパートをかけてきた。

膝の曲げ伸ばしを早め、火傷しそうなほどの摩擦熱を発しながら一物を揉み抜き続ける。「だめっ、も、もう……もた、ない……でっ、出ちゃう、出ちゃうよおおっつっつ！」

ついに限界を迎え、大きく喉を反らしながら喘ぐ銀之助。彼に呼応するように、ツインテール娘も叫ぶ。

「せ、せんばあいつ、わっ、わたしも、イクッ、イツ、イツちゃうっ……先輩と、一緒にひいっ……あつ、あぁーんっつっつ!!!」

ドピューッッッッ！ ドクッドクッドクッッッ!!

服上で大きく仰け反る少女の膣内に、男のマグマが炸裂する。乙女の泉が干上がってしまいうなほどの熱さと、小ぶりな胸が破裂してしまいうなぐらいの満足感に満たされながら、女神少女は愛しき先輩の胸に倒れこんだ。

頬を伝わる精液のツンとした刺激臭を鼻腔いっぱいには吸い込みながら、歡喜に打ち震える桂子。だが、彼女との甘く淫靡な時は、これで終わりではない。

「はふうっ、はあっ、こ、今度はあっ、はあっ……」

頬を朱に染めて、眼鏡が曇るほどの熱い息を吐きながら、起立した一物を愛しげに見つめるおさげの巨乳娘。呼吸が落ち着くと彼女は立ち上がり、レースの下着に手を掛け、柔らかな乳房を揺らし、身体を大きく前屈させながら擦り下ろした。

片足だけ抜き取ると、足首に掛かったショーツを引きずりながら彼女は、倉庫の片隅に積まれた跳び箱の元へ歩いていく。そして、うつ伏せで伸しかかると、白衣の裾をパッと背中まで捲り上げた。

少し赤みがかかった肉のスリットが、透明な粘液をチュルチュルと垂らしながら、興奮気味の呼吸に合わせて激しく開閉しているのが見える。

「こっ、今度は……わたしを気持ちよくさせて、お願い……」

振り向き、甘く潤んだ瞳で見つめながらたどたどしい口調でおねだりしてくる桂子。女裂から微かにはみ出し、妖しく蠢く肉の花弁と、大きいながらも美しく張り出した桃尻が、純情少年の魂を鷲掴みにする。

「桂木……せん、ばい……」

吸い寄せられるように、彼女の背後に歩み寄る銀之助。そして、大きなヒップを掴むと、

ヒクヒクと痙攣しながら略奪されるのを待つ淫花に、己が雄しべを突き立てた。

「んっ！」

プチュッ！

熱く湿った肉の門が、抉じ開けられる音が微かに響く。

「あぐうっ、んんっつっ」

咄嗟に跳び箱をギュッと抱きしめ、破瓜の痛みをこらえる桂子。生暖かい処女の証が、太股を伝って流れ落ちていく。

「あ……」

身を裂かれそうな苦痛に顔を歪め、声を押し殺す彼女の様子に、戸惑い動きを止める銀之助。だが、優しい彼の心中を察するように、おさげの先輩はみずから大きなヒップを突き出し、愛しき人のモノを受け入れていく。

「へ、平気ですっ、うんっ、んんんっつっ……」

ズブッ、ズブブブツツツ！

身体を内側から押し広げられる苦痛に悶えながらも、丸々とした臀部でんぶをプルプル揺らし、愛する人のモノを飲み込む桂子。背中に浮いた脂汗でジットリと湿った白衣に、幾本もの皺を刻みながら、全身を釣り上げられたマグロのように、大きく波打たせる。

苦痛の先にある、快楽を目指して。

「ああつ、あつ、熱い……熱いよお、先輩の中……」

きつい産道の中へ沈めていく肉棒に、粘液を纏った熱き肉壁が張りついてくる。ポツチヤリ型の彼女の膣内は、スリムな翔子より幾分柔らかめではあるが、それでも初めてだけに締めつけは万力の如く強い。しかし、ゼリーののような柔肉がクッションとなつて、いい塩梅で男の筋肉を押しさえつけている。

「あつ、こ、ここ……」

彼女の秘所がもたらす刺激に酔いしれているうちに、先端が最後の肉門に差ししかかった。「なあんつ、も、もつと奥まで……お願いひ……」

右手の親指をしゃぶりながら、上目遣いでおねだりしてくるおさげ娘。彼女の願いに呼応して、銀之助は腰を突き出しはじめた。

「ぐんつ、うぐううつつ……」

指が食い込むほど桃尻を強く掴み、腰を左右に振りながらゆつくりと一步踏み出すと、亀頭のエラが何かに弾かれるような刺激がピツと走った。

彼の一物は、ついに子宮に達したのである。

「あつ、ああああんんつ、は、はいったあんつ……」

下腹部からジンジンと伝わる、愛しき人を奥の奥まで受け入れる事のできた証に打ち震え、歡喜の涙を流す桂子。だが、余韻に浸っている暇はない。肉体だけでなく、心も一つ

になるのを目指して、ゆっくりと腰を振りはじめる。

「こっ、これで……どうですかはあっ!!」

操り人形のようなたどたどしい動きで、固い肉棒を先端から根元まで、肉襞や膣壁で磨くように扱いていく黒縁眼鏡の童顔娘。

「せつ、先輩……僕もお……」

彼女に引きずられるように、銀之助も腰を揺り動かしはじめる。経験を積み、ある程度は女体のツボを身体で覚えている彼の腰は、繊細な円運動や激しいピストン運動で、緩急をつけて未熟な泉を開拓していく。

チュクツチュクツ、ジプツジプツツツ!

「いっ、先輩の中……どんどん、柔らかくなっ……あうんっ」

いきり立つ肉の松明に絡みついてくる肉襞が、まるで溶けているかのように柔らかくなっているような気がした。

時が経つにつれて、緊張感で強張っていた下腹部から力が抜けると、白衣少女の膣内は難なく銀之助の巨根を受け入れられるようになってくる。汗と、みずから分泌する愛液のカクテルも手伝って、滑りのよくなった肉槍と花弁が、淫音を響かせながら火がつきそうなほど激しく擦れあう。

パフッポフッププツツツ!

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>